
縁と出会い

ジッテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
縁と出会い

【Nコード】
N9323F

【作者名】
ジッテル

【あらすじ】
祖母が逝って人の一生を思い

自分の人生の儚さを感じたことの

物語です。

タイトルがときどき変更になります。

す
い
ま
せ
ん。

縁と出会い

ジッテル

目が醒めると

天井が見えて、

私は見覚えのない場所にいた。

「ここはどこなんだ。

何故ここにいるんだ。」

腑に落ちない思いで、

体を動かそうと

力を入れるが、

体はまったく動かなかった。

背中が重苦しく

少し痛い、

体がなぜか

小さくなっていて、

何がどうなっているのか

見当もつかず、

あたりを見回した。

自分はいつたい

どうなっているのだろう。

シーン

として物音がしない。

夕方に近いのか、

まだ明るいが、

昼前後の時間では

ないようだった。

誰もいない。

寒い時期なのだろう、

分厚い掛け布団が

寝ている私の上に

掛けてあつて重く、

不安で

誰か来てくれないかと

祈るような気持ちで、

何気なく

鴨居^{かもい}のところに架^かかっている

水墨画に目がいった。

墨の濃淡で

山に木がたくさん生えているように

描いてあって、

この景色はどこか懐かしく、

自分の記憶の底に、

この墨絵の景色と

一致するものが

あるのかも知れなかった。

過去世のものなのか、

ならば

過去世のどの時代の記憶なのだろう。

過去世の記憶と

現世が

一点に交差して

甦^{よみがえ}つて来る幻なのか。

じつと

見入っているうちに

それが

立体的になって

一本一本の木が

拡大され、

森林の中に

道が通っている。

私は不思議な想いで

凝視していたが

そのうち

私はその絵の中へ

吸い込まれるように

入り込んでしまっていた。

そこは

木々が鬱蒼と

おい茂って

その中に

一軒の家が建っている。

太い縦木と横木の

四角い枠組みが出ている

真っ白な漆喰^{しっくい}の壁が

あざやかな輝きで

浮き上がって見えていた。

お寺だ。

私は

そこに住んでいた。

なぜか

そついう想いともに、

なんとも懐かしい景色が

そこにはあつたのだ。

それから

目がさめると

その水墨画の中に

入って行って

お寺の真つ白な壁を

繰り返し繰り返し

飽かず眺めていた。

ふと

我に返ると、

扉の向こうで

誰かの声がしている。

姿は見えないが

「矢島医者に

行かなくちゃ

ならないだろう」

とその声は言っていた。

私のために

医者を呼びに行った

のだろうか。

途端に

私の意識には、

寒風が吹きすさぶ闇夜に

コートのすそをはためかせて、

自転車で疾走して行く

ひとの姿が

繰り返し繰り返し

幻想のように現れて、

それが父であることは

なぜだか

直感的にわかっていた。

そして、

私が寝かされていたのは

隠居屋だった。

ということも、

いつのまにか

私の断片的な記憶の中に

入っていた。

ある日の昼下がりに、

幼い私は

祖母の腕に抱かれて

座敷の脇の廊下を

進んで行った。

まだ言葉を

しゃべることが出来ず、

「あー、

あー、」

と指をさして、

意思疎通の
いしそつう

ままならない

もどかしさを

おぼえながら

一生懸命に

何かを伝えようとしていた。

祖母は

廊下の端のあたりで

立ち止まると、

不意に

鴨居^{かもい}の上にある

メーター器の箱に

左腕を伸ばした。

そして

その中にあるものを

指でつまんで、

私の目の前にかざしてから

「こんなところにあつたー」

とひとこと言ってから

ポンと

自分の口にほうり込んだ。

私がびっくりした目で

祖母の顔を凝視

しているのをみて

悪戯を楽しむように

私の顔を覗き込んで

「あめ玉だよ。」

と言ったが、

こっちの分は無いの

という

私の顔の表情を

見て取ると

「もうないよ」

と言って笑った。

抱っこされている

私の目の高さからは

箱の中は見えなかったが、

その箱の中から

飴玉が

自動的に出てくるのだと

私は

信じ込んでしまった。

好奇心が疼いて

必死に

体を伸ばしたが

箱の中を見ることは

出来なかった。

そのとき以来

私の中では、

その箱は

飴玉製造機に

なってしまった。

箱の中に

たくさんの

小さな人がいて

一生懸命

飴を作っているのが

幻のように

見えていた。

それから

毎日

その場所に行つて、

下から箱を眺めては

箱の中に

飴玉がもう出来ていて

「あそこに手を入れれば

飴玉を取り出せるのに」

と思いながら

背が届かないもどかしさに、

地団太^{じだんた}を踏んでいた。

ひとがいると

メーター器を指さして

「あー、

あー」

と訴^{うった}えたが、

メーター器と飴のことを

知っているのは

祖母だけなので、

誰も

私の訴えを

理解することは

出来なかった。

この家には

いつも

不思議な気配が

漂っていた。

それは奈良時代か、

平安時代かの

波動があるように

感じるのだ。

そこにいる誰かの過去世が

その時代に

生きていたことが

あるのではないかと

思ったりする。

いつのことだったか、

気がつくと

私は布団の中で

目覚めたところだった。

乳飲み子の私を

目の届く座敷に

寝かせておいたのだろう。

朝なのか昼過ぎなのか、

はつきりしないが

さらさらと

葉の擦れる音をさせながら

土間でみんなが作業していた。

頭が痺れるような

強い葉生姜の香りが

あたり一面に満ちている。

見ると、

雨の中で

収穫されたのだろうか、

それとも

水を吹きかけたのか、

積まれた葉生姜の山から

ポタポタ

水がしたたっているのを

不思議な想いで眺めていた。

ふと、

何かの気配を感じた。

その土間のどこかで、

誰かがこつちを

見ているような

気がして

意識を凝らした。

すると

積まれた葉生姜の

緑色に紛^{まぎ}れて

黒く透明な姿の

河童の目が

こっそりと

身を潜めるようにして

私を窺^{うかが}っていた。

なぜ

葉生姜と河童なのか

わからないが

河童は私のことを

とっくに知っていて

様子を窺いに来たのか

あるいは

何かを伝えに来たのか。

私には定かではないが

そこには過去の時代と

現代を

ワープしている何かが

あったのか、

それとも、

そこに存在している

人々の持っている

意識の波動の

集合したものが

あらわした

幻覚だったのか。

考えてみると

人というのは

表面からだけでは

理解出来ない

何かの

エネルギーを内蔵し

さまざまなものを

現してくるものなのだろう

と思うのだ。

それから早^{はや}

年月が流れ

私は

小学生の

高学年になっていた。

あるとき、

祖母、母、叔母、妹

あと他に

誰かいたのかは

記憶が

さだかではないが、

全員そろって

東のほうの道を

どこかに向かって

歩いていた。

月も出ていない

真つ暗な真の闇、

鼻をつままれても

わからないほどだ。

道は

ジツと

目を凝らすと

微かに

ポーッと

見える程度で、

いつも通っていて

土地勘がなければ

歩くことは

出来ないほどの

闇だった。

こんな暗闇の中を

どうしても

行かなければならない用事とは

いつたい

何だったのだろう。

「みんな、

気をつけないと

堀に落ちるよ。

道の端っこのほうに

行かないようにね。」

祖母が幾度も

みんなに声をかけながら、

大きく見開いた目で

暗闇を透^すかして

慎重に歩いていた。

「よりによって、

なにもこんな闇夜に

わざわざ行かなくも

いいと思うんだけどね。」

誰かが言つと

「そうだよね。」

私もそう思うよ。

どうしても

行かなくちゃ

なんないんかい。

今日でなくちゃ

だめなんかい。」

誰かが言つと

祖母が

「今日、行つとかないと

だめなんだ。

あしたになつちやったら

何にもならないんだ。

昼間行くつもりだったんだけどさ。

いろんなことをやってたら、

すっかり忘れちゃったんだよ。」

と言った。

ちよつと広い道に出て、

微かな星明かりに

だいふ

目が馴れて来たころ、

突然、

「おつとつと、

おつとつと、

あつとつと、

あつとつと、

あーっ
」

祖母の

慌てふためいた声が

真っ暗な中に

せわしなく

響きわたって

姿が消えた。

あとは

シーンと

物音もしなくなった。

「おばあちゃん、

大丈夫」

「かあさん、

大丈夫かい」

みんなが慌てて

口々に声をかけたが

いっこうに

返事が返ってこない。

「大丈夫かな。

自分で気をつけてって

言っただのに、

自分が落っこっちゃったよ。

まったく

おっちょこちょいなんだから」

と話しているところへ、

祖母が息を切らして

堀から

照れ笑いで出てきた。

「だから

気をつけなくて

言つたろう。

油断すると

こうなつちゃうんだよ。」

あたかも

自分が身をもつて

示したんだぞと

言わんばかりに

言つた。

ひとに言う前に

自分が

気をつけなくちゃ

だめなんじゃないのと

心の中で思った。

祖母のおっちょこちよいは

筋金入りなのだ。

私は子供の頃から

父の仕事の関係で

東京に行ってしまったために、

祖母と一緒に住んでいたのは

幼児期のみで

別の場所に

離れて住むように

なつたあとは

少し祖母との距離が

遠退いてしまっていた。

東京で私も

忙しい毎日を

送っていたが、

珍しく祖母が

東京の家に

遊びに来たのだ。

うちの様子見て

立ち寄ってから、

祖母の妹の家に行く

予定のようだった。

祖母の妹も

東京に居を構えていた。

話をしながら、

お茶を

したたか飲んだあと、

祖母が

トイレに行った。

しばらく静かだったが

突然

ドカーン

ガラガラ

「あれー」

何かが

崩れ落ちる音と、

祖母の

間の抜けた悲鳴が

聞こえた。

走って行くと、

トイレの中で

祖母が

オロオロと

なすすべもなく

立ちつくしていた。

前の漆喰しっくいの

白壁が崩れ落ち、

下の茶色い土壁が

むき出しになって、

漆喰の残骸が

あたり一面に

散らばっている。

」 どうしよう。

どうしよう。

壁がはがれちゃった。
」

申し訳なさそうに、

どうしようを

繰り返していた。

その家は

戦後の

焼け野原に建てられたもので、

古くなって、

ちょうど

目の高さあたりの

漆喰と土壁の間に

接着力がなくなって

浮き上がっていたのだ。

指で押すと

プクプクと動く。

ヒビも入っていて、

だいぶ弱っていたが

長い期間

そのまま

放置されていて、

いつはがれ落ちても

おかしくない

状態ではあった。

祖母は

そこに手をついたのか。

それとも

よろめいて

手が泳いでいるうち

割れているそのところへ

指が入ってしまったのか

と、まあ

そんなところだろう。

やはり粗忽^{そこっ}は筋金入りなのだ。

祖母の行くところ事件が起こる。

しかし、

考えてみると、

祖母は

以外にいたずら好きで、

私を驚かせるために

前もって

メーター器の箱に

飴玉を

仕込んでおいて

私を驚かせたり、

笑いを取るために

わざと堀に落ちたり、

トイレの漆喰も

浮いているのが

面白くて、

指で引っ張ってみたら

思いもかけず

全部崩れ落ちてしまったり、

ということでは

なかったのかな

としたりもしてみたが、

なにしろ

ミシンで自分の指を

縫ってしまつほどの

猛者であることを考えると、

やはり

おっちょこちょいの

つわものだった

のかも知れない。

いまとなつては、

いろいろな出来事が

祖母のジョークだったのか、

本当に粗忽そこつだったのか、

尋ねようとしても
たず

確かめるすべは

なくなってしまった。

祖母と私の縁生は

過去世の

いつの頃からの

ものなのだろうか。

転生輪廻により

延々と

生まれ変わって来て

これからも

それは続いて行くだろう。

この次の

来世は

どのように出会うのだろうか。

人と人との出会いは

短かいが

その出会いに

内蔵されている

本当の意味を理解することが

出来るようになれば

どんなに素晴らしいだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9323f/>

縁と出会い

2011年11月14日22時00分発行